

親鸞における三経観(一)

三 木 彰 円

一

法然は『選択本願念仏集』(以下『選択集』と記す)教相章において、

正しく往生浄土を明すの教といふは、三経一論是れなり。三経といふは、一には『無量寿経』、二には『観無量寿経』、三には『阿弥陀経』なり。一論といふは、天親の『往生論』是れなり。或は此の三経を指して浄土の三部経と号す。(中略)今は唯是れ弥陀の三部なり。故に浄土の三部経と名づくるなり。弥陀の三部といふは、是れ浄土の正依経なり。

(真聖全一・九三二頁)

と述べ、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』を「浄土の正依経」として位置づける。この法然の提示を承けて、親鸞は『顕浄土真実教行証文類』(以下『教行信証』と記す)の全体を『無量寿経』を軸として展開し、浄土真宗を開顕していくのであるが、そのことは「顕浄土真実教行証文類序」に続いて置かれる、

大無量寿経 真実之教
浄土真宗

顕真実教一

顕真實行二

顕真實信三

顕真實証四

顕真仏土五

顕化身土六

という総標と標列に端的に示されていることである。⁽²⁾一方、『観無量寿経』と『阿弥陀経』については、標列に「顕化身土六」と記される「顕浄土方便化身土文類六」において、その標挙に「無量寿仏観経之意」「阿弥陀経之意」⁽³⁾と示している。そこには、三経の関わりを「浄土の真実」と「浄土の方便」という関わりにおいて見出し、「観無量寿経」と『阿弥陀経』の教説を『無量寿経』に包摂してとらえていく親鸞の視点を看取することができる。⁽⁴⁾

三経の間にこのような関わりを見出していくことが、何によってなされるものであるのかを考える時、そこにまず指摘できるのは、三経の教説を単に釈迦の説として見るのではなく、阿弥陀と釈迦の二尊の大悲の呼応に立って三経の教説を領受しようとする親鸞の態度である。そこには釈迦一尊教としての仏教に対して、仏教を弥陀・釈迦二尊教において見出すという仏教観があると言えるが、親鸞は釈迦によって開示された三経の教説の根源に第十八願・第九願・第二十願という阿弥陀の本願を見出すことを基点として、改めてそこから「顕彰隱密の義」⁽⁵⁾を立てて、三経それぞれに説示される教説相互のうえに相即不離の關係があることを確かめていくのである。このような視点に立つ時、親鸞において、衆生のうえに「正定聚之機」・「邪定聚之機」・「不定聚之機」⁽⁶⁾という機の確認がなされるということは、二尊の大悲に立脚する人間觀の開示として受けとめなければならぬし、それぞれの機に「難思議往生」・「双樹林下往生」・「難思議往生」⁽⁷⁾という往生の課題が確認されていくことも、二尊による大悲摂取・大悲撰化の事実を衆生の現実において推求する営みであると言わなければならない。

三経について、本願・教一機・往生という視点を軸となされる親鸞の推求は、『教行信証』においてなされるにとどまらず、その生涯において一貫してなされたものであることは、例えば建長七年（一二五五・八十三歳）の『三経往生文類』（略本）の製作、康元二年（一二五七・八十五歳）に『三経往生文類』（広本）の製作ということに明らかであるが、それら『教行信証』や『三経往生文類』に展開される親鸞の三経観を尋ねるに先だって、改めてその基点にある法然による三経の位置づけを『選択集』に確認するとともに、親鸞の『観阿弥陀経集註』を『選択集』に関するものとしてとらえた上で、親鸞における三経の領受のあり方を見ていこうとするのが、本論の目的とするところである。

二

冒頭に掲げたように、法然は『選択集』において『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』を「浄土の三部経」と言い切るのであるが、法然に先立ってこの三経に着目したのは曇鸞である。曇鸞は天親の『無量寿経優婆提舍願生偈』の題号を註解して、次のように述べる。

「無量寿」は是れ安楽浄土の如来の別号なり。釈迦牟尼仏、王舎城及び舍衛城に在まして大衆の中に於て無量寿仏の莊嚴功德を説きたまへり。即ち仏の名号を以て経の体とす。後の聖者婆敷槃頭菩薩、如来大悲の教を服膺して、経に傍へて願生の偈を作れり。

（真聖全一・二七九頁）

曇鸞はここで、天親が優婆提舍する『無量寿経』について、王舎城所説の『無量寿経』と舍衛城所説の『阿弥陀経』を重ねて確認している。二経に対する曇鸞のこの了解は、「仏の名号を以て経の体とす」という言葉に示されるように、経の会座は異なっても、その体を同じくするという確認のもとになされるものである。曇鸞はこの確認のもとに、『浄土論註』卷上讚嘆門釈には『阿弥陀経』を「舍衛国所説の『無量寿経』」と掲げ、『論註』卷下・善巧撰化

章には『無量寿経』を「王舎城所説の『無量寿経』⁽¹⁰⁾」と掲げている。両経をもとに『無量寿経』としてとらえることを通して、さらに兩功德莊嚴の註解においては、『無量寿経』『阿弥陀経』両経の経言を重ねて合わせて取意し「『経』に言はく」と、一経の教言として掲げていくのである。

曇鸞はまた『論註』卷上・八番問答の第一問答において、

問ふて曰はく。天親菩薩、回向の章の中に「普共諸衆生往生安楽国」と言へるは、此れは何等の衆生を「共」と指したまふや。答へて曰はく。王舎城所説の『無量寿経』を案ずるに、「仏阿難に告げたまはく。十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを称嘆したまふ。諸有の衆生、其れ名号を聞きて信心歡喜せむこと乃至一念せむ、至心回向したまへり、彼の国に生まれむと願すれば即ち往生を得、不退転に住せむと。唯五逆と誹謗正法を除く」と。此れを案じて言はく、一切外道凡夫人、皆往生を得む。又『観無量寿経』の如きは九品の往生有り。

(同三〇七頁)

と、『願生偈』における天親の「普く共に」というよびかけが、どのような衆生に対してなされたのかを確認する。そのことを通して、「仏の名号」を体とする経の機を『観無量寿経』に説示される九品の上に確かめていくのである。このように、曇鸞において『無量寿経』と『阿弥陀経』、そして『観無量寿経』の上に、経教としての「仏の名号」と、その機が確認されたことを通して、天親の『浄土論』は後に「三部(経)通申の論」として位置づけられていくことにもなるが、曇鸞の三経に対する視点を直接に引き継ぐのが道綽の『安楽集』である。

『無量寿経』を「大経」という経名でとらえることは道綽によるものとされるが、『安楽集』のうちに掲げられる経名を確認していく時、『無量寿経』を「無量寿大経」「大経」⁽¹³⁾と呼称することは、

第一に略して諸の大乗経を挙げて来証して、皆勸めて此を捨て、彼を憐はしむとは、一には謂く耆闍崛山の説、『大経』二卷。二には『観経』一部、王宮・耆闍両会の正説なり。三には『小卷無量寿経』舎衛の一説。四には

復た『十方隨願往生經』の明証有り。五には復た『無量清淨平等覺經』二卷、一会の正説有り。六には更に『往生經』一卷有り。諸余の大乗經論にも指讚する処多し。『請觀音』・『大品經』等の如し。又、龍樹・天親等の論の如き、歎勸、一に非ず。余方の淨土は、皆此くの如く丁寧ならず。

(同四三〇頁)

という第八大門の文に見られるように、『阿弥陀經』を「小卷無量壽經」と位置づけることに對してなされる呼称であることがわかる。

しかし、『無量壽經』『阿弥陀經』兩經に對するこの道綽の位置づけは、經典を単にその分量において区分しようとするものではない。前者を「耆闍崛山の説」、後者を「舍衛の一説」と示すように、また第九大門には『阿弥陀經』を「是の故に『無量壽經』に云く¹⁴」と掲げることにも見られるように、曇鸞が「仏の名号を以て体とす」という点に確認した兩經の關係をふまえるものであり、そのうえで、「諸の大乗經を挙げて來証して、皆勸めて此を捨て、彼を怖はしむ」という、『安樂集』における道綽自身の主題に基づいて、兩經を他の大乗經との関わりの中で位置づけるものと見ることが出来る。

これらにもまして三經に對する道綽の了解において注意しなければならないのは、『無量壽經』の第十八願を『觀無量壽經』の下品下生の教説と重ねて確認しているということである。道綽は『安樂集』第三大門に、聖道門と往生淨土門の二門を確認し、

当今は末法にして、現に是れ五濁惡世なり、唯淨土の一門有りて通入すべき路なり。

(同四一〇頁)

と、淨土門に立つという決判を明らかにするが、その根拠として、釈迦が開示する阿弥陀の本願を、次のように掲げていく。

是の故に『大經』に云く。「若し衆生有りて縦令ひ一生惡を造れども、命終の時に臨みて十念相續して我が名字を称せんに、若し生れずは正覺を取らじ」と。

(同四一〇頁)

ここには『無量寿経』第十八願に「十方衆生」とよびかけられる者が、『観無量寿経』下品下生に「不善業たる五逆十悪を作る」衆生、「諸の不善を具せる」「愚人」、すなわち「一生造悪」というところに確認されている。この道綽の確認は、先に触れた『浄土論註』八番問答における曇鸞の確認と軌を同じくするものであって、さらにはその確認に末法・五濁という「時」をもふまえて依るべき教を見出そうとするのである。

これらの曇鸞から道綽に至る三経の確認によって、「浄土の正依経」としてある三経相互の教説の関わりが浮かび上がっていくわけであるが、一方にはまたそれと比例して、三経を他の諸経との関わりにおいて、どのように位置づけ、とらえていくのか、ということも課題になっていく。そのことは先に引用した『安樂集』の第八大門において道綽が「諸の大乗経を挙げて来証して、皆勸めて此を捨て、彼を怖はしむ」と述べるところにも窺われることである。

例えば「諸教の讚ずる所、多く弥陀に在り」と言われるように、阿弥陀仏あるいは浄土に関わる内容を諸経論疏の中に尋ねるならば、そこには膨大なものがあると言わなければならないし、それゆえにそれらの多くの文言のいずれに依って立つかは、各人各人に委ねられた事柄としてとらえられてきたのも実際のところであろう。そのことは仏教の歴史において、浄土教に対する位置づけが、寓宗という域を出ることがなかったという事実 realistically 表れていることでもある。しかし、そこに確認し、明らかにされなければならないのは、教説を受けとめる自己をどのような「機」として確かめるのかということである。その点が確認されることがないならば、どれほど教説に依ると主張したにせよ、所詮それは自己の論理の範疇か、あるいは自らの恣意においてなされる判断ということにしかすぎないことにもなる。

曇鸞は自らの回心を通して「五濁の世、無仏の時」という現実立って本願の機を確認するわけであるが、その曇鸞を指南として、道綽は、聖道・浄土の二門をもって仏教を確認し、「当今は末法にして、現に是れ五濁悪世なり」という決判のもとに、「一切衆生、都て自ら量らず」、「若し起悪造罪を論ぜば、何ぞ暴風駛に異ならん」、「何ぞ思量

せずして都て去く心無きや」と喚起する。この道綽による仏道の決判を根拠として、法然は『選択集』教相章において、「聖道を捨てて、正しく浄土に帰す¹⁷⁾」と、浄土宗という仏教の立場を明らかにするが、それは教と機との相應の課題をもまた明らかにするものと言えるのである。

法然における浄土宗独立の背景をこのように確認したうえで、「浄土の三部経」、「浄土の正依経」を位置づける、初に正しく往生浄土を明すの教といふは、三経一論是れなり。三経といふは、一には『無量寿経』、二には『観無量寿経』、三には『阿弥陀経』なり。一論といふは、天親の『往生論』是れなり。¹⁸⁾

(同九三二頁)

という文を再度見る時、法然は「正しく往生浄土を明かすの教」を単に「三経」と示すのではなく、「三経一論」と示していることには、特に注意を払う必要がある。 「三経一論」という言葉は、「三経」の一経一経と、「一論」とを平板に羅列するものではなく、あくまでもそれは、「一論」たる『往生論』の冒頭の、

世尊、我一心に尽十方無碍光如来に帰命して安楽国に生ぜん願ず

我、修多羅真実功德相に依りて、願偈を説きて総持して、仏教と相應せむ

(同二六九頁)

という天親の表白が明らかにするように、「三経」と「一論」との間に、機教の相應を確認するものである。経典が教を明らかにするものであることは言うまでもない。しかし、経典のうえに教を仰いでいくことは、機における問題としてある。その意味で「経言」は、それを領受する機をまつてはじめて「教言」となるのであり、そこにそのはたらきを全現すると言えよう。法然が「三経・一論」に確認するのは、そのことではないだろうか。

三

法然は第十六・慇懃章私釈に、

凡そ三経の意を案ずるに、諸行の中に、念仏を選択して、以て旨帰と為す。

(同九八八頁)

と、三経の「旨帰」を確認している。そして三経に「選択」という視点に立つて、

『無量寿経』…(一) 選択本願・(二) 選択讃嘆・(三) 選択留教

『観経』…(四) 選択撰取・(五) 選択化讃・(六) 選択付属

『阿弥陀経』…(七) 選択証誠

という七つの選択を確認し、併せて『般舟三昧経』による「選択我名」を加えて八つの選択を示す。また、三経に示されたそれぞれの選択は、

弥陀選択…(一)(四)(八)(五)

釈迦選択…(二)(三)(六)

諸仏選択…(七)

と、弥陀・釈迦・諸仏の選択として確認され、以上を結んで、

然れば則ち釈迦・弥陀及び十方の各おの恒沙等の諸仏、同心に念仏の一行を選択したまへり。余行は爾らず。故に知んぬ、三経共に念仏を選びて以て宗教と為すならくのみ。(同九八九頁)

と三経の「宗教」が「念仏を選」ぶことにであると確かめている。

三経の「宗教」が念仏の選択にあるというこの確認は、三経における七つの選択の根本が、詰まるところ『無量寿経』の選択本願にあることを示すものであると言える。この視点から「浄土の三部経」を全十六章に配当して構成される『選択集』全体をとらえるならば、『選択集』の根本は選択本願を明らかにする本願章にあると見ることができると、選択本願を説く『無量寿経』によって『観無量寿経』『阿弥陀経』の二経を包摂してとらえる『選択集』一部の意図を確認できよう。

法然は、「弥陀如来、余行を以て往生の本願と為したまはず、唯念仏を以て往生の本願と為したまへる」⁽¹⁹⁾ことを明ら

かにする本願章において、『無量寿経』に「二百一十億の諸仏の妙土清浄の行を撰取す」と示される「撰取」という言葉を、異訳の『大阿弥陀経』・『平等覚経』に示される「選択」によって確認して、

選択といふは、即ち是れ取捨の義なり。謂はく、二百一十億の諸仏の浄土の中に於て、人天の悪を捨て、人天の善を取り、国土の醜を捨て、国土の好を取るなり。『大阿弥陀経』の選択の義、是くの如し。『双卷経』の意、亦選択の義有り。謂く「二百一十億の諸仏の妙土清浄の行を撰取す」と云へる是れなり。選択と撰取と、其の言異なりと雖も、其の意、是れ同じ。然れば不清浄の行を捨て、清浄の行を取るなり。

(同九四一頁)

と述べる。この確認は、「一切の諸行を選び捨て、唯偏に念仏の一行を選び取りて、往生の本願と為したまふ²⁰⁾」という本願の根本性格を確認しようとするものである。

法然はこれについて、まず勝劣の義の確認を通して、

然れば則ち仏の名号の功德は、余の一切の功德に勝れたり。故に劣を捨て勝を取りて、以て本願と為したまふか。

(同九四四頁)

と、「名号の功德」をもって衆生を撰取することに選択本願の力用を確かめ、さらに難易の義による確認を通して、故に知んぬ、念仏は易きが故に一切に通じ、諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然れば則ち一切衆生をして、平等に往生せしめむが為に、難を捨て易を取りて、本願と為したまふか。

(同)

当に知るべし、上の諸行等を以て、本願と為したまはゞ、往生を得る者は少なく、往生せざる者は多からん。然れば則ち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を撰せむが為に、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と為したまはず、唯称名念仏の一行を以て、其の本願と為したまへり。

(同九五五頁)

と述べて、選択本願は「一切衆生」を「平等に」撰取することと、その本願による撰取の根源に、「平等の慈悲に催

されて、普く一切を摂せむ」とする大悲心を確認していくのである。

阿弥陀の本願とはいかなる願であるのか。法然はそのことを「選択」という一点に確認する。それは経説を通して、本願をして本願たらしめ、阿弥陀仏をして阿弥陀仏たらしめる根源を尋ね、その根源に本願の機としてある自身と十方衆生を見出すことにおいてなされたものであるといえる。

四

法然は浄土宗独立の根拠を、問答を立てて次のように述べる。

問ふて曰はく。華嚴・天台・真言・禪門・三論・法相の諸師、各おの浄土の法門の章疏を造れり。何ぞ彼等の師に依らずして、唯善導一師を用ふるや。答へて曰はく。彼等の諸師、各おの皆、浄土の章疏を造ると雖も、而も浄土を以て宗と為さず、唯聖道を以て而も其の宗と為す。故に彼等の諸師に依らざるなり。善導和尚は、偏に浄土を以て、而も宗と為して聖道を以て宗と為さず。故に偏に善導一師に依るなり。

(同九九〇頁)

法然は自らの立場が「偏に善導一師に依る」ものであると、はっきりと言いつけるのであるが、そうであるならば、本願の根本性格を「選択」という一点に確かめ、選択本願を説く『無量寿経』をもって三経の経説をとらえていくことの根拠を、善導のどのような視点に確認できるだろうか。

そこに想起されるのは、次の言葉である。

然るに娑婆の化主、其の請に因るが故に、即ち広く浄土の要門を開く、安樂の能人は別意の弘願を顕彰す。其の要門とは、即ち此の『観経』の定散二門是れなり。定は即ち慮を息めて以て心を凝らす、散は即ち悪を廢して以て善を修す。斯の二行を回して往生を求願せよとなり。弘願と言ふは、『大経』の説の如し。一切善惡の凡夫、生を得る者は、皆、阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁とせざることを莫し。

(『観経疏』「玄義分」 同四四三頁)

善導は『観無量寿経』の玄義を示すにあたり、『観無量寿経』を『無量寿経』に説示される「弘願」によって確かめている。善導の『観経疏』は、単に『観無量寿経』一經の釈義をなすものではなく、「弘願と言ふは、『大經』の説の如し。」と言うように、あくまでも『無量寿経』を根底に据えて釈義するものであるが、『観無量寿経』と『無量寿経』の二經の関わりを、「要門」と「弘願」という言葉で確認している。善導は「一切善惡の凡夫」の「得生」が「弘願」によることを明らかにするが、ことにそれを「阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁とせざることを莫し。」という表現で強く言い切っていく。ここに見られる「弘願」についての確認は、本願を「選択」という言葉で確かめていく法然の視点と重なるものがあることを確かめることができる。善導はその一方で、『観無量寿経』に「浄土の要門」を確かめ、『観無量寿経』の經説に「二行を回して往生を求願せよ」という衆生へのよびかけがあることを示している。

この善導の視点は、法然が『選択集』において選択本願を説く『無量寿経』に『観無量寿経』『阿弥陀経』を包摂して三經をとらえていくことと、どのように関わっていくのか。善導と「偏に善導一師に依る」法然という二師における三經への着眼を確認していくうえで、『無量寿経』によって『観無量寿経』『阿弥陀経』の二經を確かめていくことと、『観無量寿経』『阿弥陀経』を通して『無量寿経』を確かめていくことと、その二つの方向のもとに、三經の関係を明らかにしていく。そのような課題が親鸞のなかに見出されるところから、『観阿弥陀経集註』という著作への取り組みがなされていったのではないだろうか。

【凡例】

*引用文については、現行字体を用いて示し、原漢文のものは書き下し文に改め適宜句読点を付した。

*出典は次のように略記した。

『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』（大谷大学編、東本願寺刊）↓翻刻篇

『真宗聖教全書』↓真聖全
『定本親鸞聖人全集』↓定親全
『大正新修大藏經』↓大正藏

註

- (1) 『選択本願念仏集』教相章（真聖全一・九三二頁）
- (2) 親鸞自筆「坂東本」にはこの箇所は欠損しているため、今、『教行信証』専修寺藏写本、西本願寺藏写本による（翻刻篇・六七九、六八一頁参照）。
- (3) 翻刻篇・四六四頁
- (4) 『教行信証』に見られる三経のとらえ方は、『浄土和讃』にも確認できるものである。『浄土和讃』の「大経意二十二首」（『浄土和讃』国宝本・定親全一和讃篇・三三三頁）は、『無量寿経』を「如来興世の本意には 本願真実ひらきてぞ 難値難見ときたまひ 猶霊瑞華としめしける」（同三五頁）という和讃にうたわれるように、『無量寿経』を「本願真実ひらく」という点に確認するものであるが、親鸞はその「大経意」和讃の第十二首に「臨終現前の願により 釈迦は諸善をことごとく 観経一部にあらわして 定散諸機をすゝめけり」（同三九頁）と讃じ、また第十五首には「果遂の願によりてこそ 釈迦は善本徳本を 弥陀経にあらわして 一乗の機をすゝめける」（同四二頁）と讃じている。「大経」に包摂して「観経一部」と「弥陀経」とを確認し讃嘆するところに、『教行信証』と軌を一にする視点がある。
- (5) 「方便化身土文類」（翻刻篇・四七九頁）
- (6) 翻刻篇・一五〇、四六四頁
- (7) 翻刻篇・一五〇、四六四頁
- (8) 康元二年（一二五七・八十五歳）に製作された『三経往生文類』（広本）は、建長七年（一二五五・八十三歳）製作の『三経往生文類』（略本）に、康元元年（一二五六・八十四歳）製作の『如来二種回向文（往相回向還相回向文類）』を収録し整備するかたちで製作されている。

また三経観に関わる親鸞の著作として、製作の時期は特定されていないが、『経釈要文（二尊大悲本懐）』と通称される真蹟が現存する（定親全六所収）。『経釈要文』は軸装されているが、全体を六段に区切る形で文言が記される。最上段には源信『往生要集』による二文（序文、「我亦在彼撰取之中（大悲無倦常照我身）」と覚運『念仏宝号』による一文、第二段には釈迦の「出世素懐」を確かめる四言十二句、第三段には第二段の句の註、第四段には阿弥陀仏の本願建立を確かめる四言十二句、第五段には第四段の句の註、第六段には『無量寿経』発起序の文が記されている。

この『経釈要文』の特徴のいくつかを指摘すれば、おおよそ以下の通りである。

(一) 『無量寿経』発起序の文が抜き書きされている。

(二) 釈迦の「出世の素懐」を「唯弥陀大悲の誓願を説きたまふ」と確認し、「一切を度せむが為に三部を演説したまへり浄土を顕さむが為に三往生を開けり」と記し、三経と三往生とが示されるが、相互の関係は直接には示されない。

(三) 阿弥陀を「久遠正覚 阿弥陀仏」と示し、「六八の選択悲願を建立せり 其の中の三願は一切を引撰したまふ」と記し、註記によってその三願が第十一願、第十八願、第十九願と示されるが、『教行信証』において三経に位置づけられる三願とは異なっている。

(四) 釈迦の成道が「成等正覚」という言葉で示され、「成等正覚者住正定聚必至滅度 次如弥勒也」と註記される。

(五) 源信の文と並べて記される覚運『念仏宝号』の文は、現存する親鸞の他の著作には見られないものであるが、そこに示される釈迦と弥陀との関係は、(三)に挙げた阿弥陀の確認に重なるものであり、また『浄土和讃』諸経意の第二首に通じていくものである。

『経釈要文』は、その全体の印象としては『教行信証』に先立つ成立のものとも思われるが、成立時期の問題やその内容については、機会を改めて検討することとしたい。

(9) 真聖全一・二八二頁

(10) 同三三九頁

(11) 同二九二頁

(12) 「無量寿是安楽」と等は、論の名義を解す。「王舍城及び舍衛に在りて」とは、具さに三経の説処を挙ぐらくのみ。此の

文に依りては、鸞師の意、今此の論を以て、以て三部通申の論と為す。義寂・宗暎、同じく三部通申の義に依る。智昇・智光、共に『大經』別申の義を存す。〔六要鈔〕 真聖全一・二四〇頁

(13) 『無量寿大經』(真聖全一・三八〇、四〇二頁等)、『大經』(同三八五頁等)

(14) 同四三四頁

(15) 『諸教所讀多在弥陀』(湛然『止観輔行伝弘決』卷第二之一、大正藏四六・一八二頁)

(16) 真聖全一・四一〇頁

(17) 『選択集』教相章(同・九二九頁)

(18) 法然による「三經一論」、あるいは「浄土の三部經」の位置づけは、後に掲げる源信『往生要集』大門第三・極樂証拠門の文との関わりがしばしば指摘されている。しかし、一方で一代仏教における「往生極樂の教行」の位置を確かめるといふ『往生要集』自体の課題とも相まって、極樂証拠門に示される諸經・諸論は、「諸教の讚ずる所、多く弥陀に在り」というとらえ方に止まるものもあるように思われる。

「大門第三に、極樂の証拠を明さは二有り。一には十方に対し、二には兜率に対す。初に十方に対すと、問ふ。十方に浄土有り、何ぞ唯極樂にのみ生ぜんと願ふや。答ふ。天台大師云はく。「諸の經論は、処処に唯衆生を勧めて、偏に阿弥陀仏を念じ、西方極樂世界を求めしめたり。『無量寿經』・『觀經』・『往生論』等の、数十部の經論の文は、慇懃に指授して西方に生まれんことを勧めたり。是こを以て偏に念するなり。」已上 大師、一切の經論を披閱したまへること、凡そ十五遍なり。応に知るべし、述ぶる所、信ぜずばあるべからず。迦才師の三卷の『浄土論』には十二經・七論を引けり。一には『無量寿經』、二には『觀經』、三には『小阿弥陀經』、四には『鼓音聲經』、五には『稱揚諸仏功德經』、十一には『大阿弥陀經』、十二には『無量清浄平等覺經』なり。〔已上〕『双卷無量寿經』『清浄覺經』『大阿弥陀經』同本異訳なり。一には『往生論』、二には『起信論』三には『十住毘婆沙論』、四には一切經中の『弥陀偈』、五には『宝性論』、六には龍樹の『十二礼偈』、七には『撰大乘論』の弥陀偈なり。〔已上〕智慍師、之に同じ。私に加へて云く。『法華經』の薬王品・『四十華嚴經』の普賢願・『目連所問經』・『三千仏名經』・『無字宝篋經』・『千手陀羅尼經』・『十一面經』・『不空羼索』・『如意輪』・『隨求』・『尊勝』・『無垢浄光』・『光明』・『阿弥陀』等の諸の顯密の教の中に、専ら極樂を勧むること称げて計ふべからず。故に偏に願求する

なり。」(同七七四頁)

(19) 同九四〇頁

(20) 同九四三頁